

## 教育講演①

## 「社会福祉法人白ゆり会での赤ちゃん体操と発達支援事業の取り組み」

石原 忍\*

## 【要旨】

社会福祉法人白ゆり会（以下当法人と呼ぶ）では、平成23年に障害児通所支援事業所「岡山白ゆり発達支援センター」を設立し、同年よりその事業の柱の一つとして赤ちゃん体操を行っている。赤ちゃん体操のほか、保育所等訪問支援、グループレッスン（就学前クラス・就学後クラス）マンツーマンレッスン（就学前クラス・就学後クラス）障害児相談支援事業を行っている。当法人では、5つの支援の柱を立てて事業に取り組んでおり、これまでの実践を振り返りその有効性について検討したい。

キーワード：赤ちゃん体操、障害児通所支援事業、インクルーシブ保育、保護者支援

## 【事業の概要】

当法人では現在、①認定こども園白ゆり（定員190名）②第二白ゆり保育園（定員150名）③白ゆり小規模保育園（定員19名）④岡山白ゆり発達支援センター（障害児通所支援事業所＝1日定員40名）⑤インクルーシブ教室白ゆり（障害児通所支援事業所＝1日定員10名）⑥障害児相談支援事業所白ゆりの6つの事業所を運営している。ダウン症の子どもの育てについては岡山白ゆり発達支援センターを中核にして行っている。0歳～18歳までの児童を対象に、多機能型事業所としてのトータルなサポートを目指している。

## 【白ゆりの発達支援で大切にしていること】

それぞれの事業所においては、以下の5つの支援の柱を立てて日々の実践に取り組んでいる。

## (1) 子どもを知る

当法人で支援を行っているダウン症児の中には、IQ値が50～75の児童が多い。こうした知的な遅れに対して単にIQ値のみに注目するのではなく、可能な限り分析的に子どもの特性をとらえるよう留意している。例えば認知処理特性の面から、音韻処理・形態処理・意味処理のどの部分に支援が必要なのか仮説を立てながら実践に取り組む。記憶の部分に課題が見られる子どもについては、エピソード記憶・意味記憶・手続的記憶のうち、まずその子が一番得意とするものから取り入れていくように配慮する。仮にその時点で課題が出来にくい場合であっても、支援者が脳の機能局在等を意識しながら、ど

の部分を用意的に刺激しておくことが将来の課題解決に結びついていくのかを考えて取り組むようにしている。

## (2) 「出来ない」ではなく、「どうしたら出来るか」を考える

ICF (International Classification of Functioning, Disability and Health) は、人間の生活機能と障害の分類法として、2001年5月世界保健機関 (WHO) 総会において採択された。図1 ICFの特徴は、これまでのWHO国際障害分類 (ICIDH) がマイナス面を分類するという考え方が中心であったのに対し、ICFは生活機能というプラス面からみるように視点を転換し、さらに環境因子等の観点を加えたことである<sup>1)</sup>。

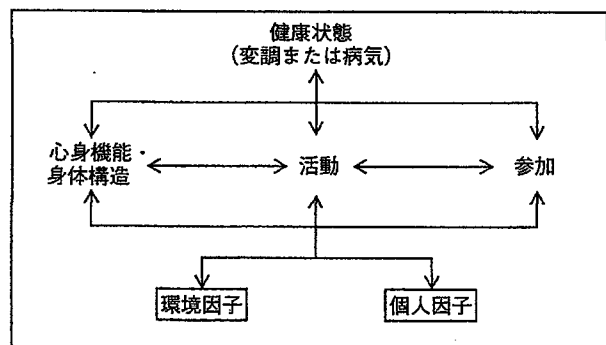


図1 ICFの構成要素間の相互作用

当法人で支援を行っているダウン症児の中には、数量にかかわる学習や活動の苦手な子が多い。そんな子の場合、順序数として数をとらえることが出来ても、なかなか集合数としての見方が出来にくい。そこで集合数としての見方を育てていくために

\*社会福祉法人白ゆり会 発達支援事業部 統括

①お買い物のロールプレイを通して数に親しむ活動を構成する(活動) ②ご家族にお願いして地域で買い物をする機会を設ける(参加) ③学校・家庭・地域に具体的に数に親しむ環境を提案する(環境因子) ④その児童の内発性や達成動機を生かした支援や評価を工夫する(個人因子)といった支援を具体的に構成していく。すぐに結果が出る事例は少ないが、3年5年と支援を積み重ねていくうちに、だんだんと学習レディネスが整い、一定の時期に大きく向上した事例が複数見受けられた。

### (3) コミュニケーション力を育ての中核に据える

当法人では、発達支援目標を図2のように定めている。コミュニケーション力は育てていきたい力の根幹であり、白ゆりの発達支援の中核をなすものである。

白ゆりの発達支援目標

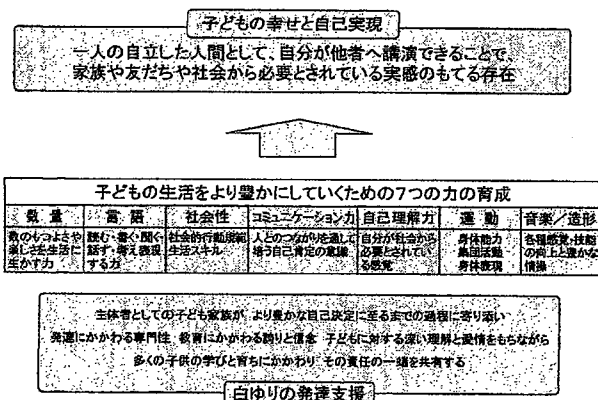


図2 白ゆりの発達支援目標

ダウン症児のコミュニケートにおいては、場の空気を察したり調整機能が良かったりする反面、言語理解に対して言語表出が遅れるといった課題が指摘されている<sup>2)</sup>。その背景には、概念化や語想起が苦手なことに加えて、言語にかかわる育ての機会の少なさが起因する。当法人においては、ダウン症児の言語にかかわる育ての方略として、①子どもの好きなことを見つける②子ども世界を共有する③子ども主体の活動の場を構成する④ライブ感を大切に、活動に発展性をもたせる⑤文字・話し言葉・書き言葉との接点を構成する⑥非言語の子ども言葉を感じ応答的にかわる⑦個の育てと集団の育てのバランスを考える、の7つを設定し実践に取り組んでいる。

### (4) シンプルで発展性のあるアプローチを構成する

当法人では、①スモールステップ法と②支援除去法の2つを支援のアプローチとして位置づけてい

る。

スモールステップ法においては、それぞれの子どものその時の発達段階や特性を理解し、課題分析によってねらいを焦点化した上で、それぞれの活動の系統性を脈々と構成していくことを重視している。

支援除去法については、可能な限り標準化された課題にチャレンジし、発達の最近接領域に対して子どもがエラーレスで解決していくための有効で最小限の支援のあり方を模索している。

実践現場においては、支援の仕方一つで全く違う結果がしばしば起こる。同じ支援方法であっても、Aという支援者でうまくいくことが、Bという支援者では失敗に終わることも起こる。そのタイミングであったりバランスであったり経過であったり、そうした背景や文脈の中で支援者の願い・子どもの実態・課題のねらいをうまく結びつけていくことが大切である。

実践者としての力量を高めていくために、それぞれの支援場面でスモールステップ・支援除去の柱立てを明確にして取り組むようにしている。うまく行った事例とそうでない事例の中から、帰納的・分析的にその要因を探り出し、整理し一般化していくプロセスが重要であると考えている。

### (5) ご家族と共に歩む

当法人では、「白ゆり5つの約束」図3 という形で保護者支援のあり方を定めている。

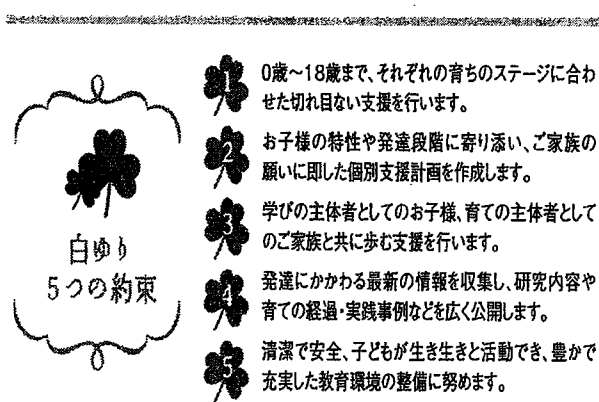


図3 白ゆり5つの約束

法人設立以来、職員スローガンとして「一人の子ども・一人の保護者に寄り添うことからすべての事業がスタートする」ことを掲げている。

岡山白ゆり発達支援センター本館は、平成26年岡山市民間社会福祉施設等施設整備補助金により建設された。その審査会で評価されたことの一つが、

赤ちゃん体操を卒業して間もない一人のダウン症の子どもに対するエピソードであった。

保護者の方より落成式に寄せられた謝辞は以下のようなものである。

「保護者を代表致しまして、一言お礼を述べさせていただきます。本日は、私達の子どものために、このような素晴らしい白ゆり発達支援センター本館を授けてくださり、本当にありがとうございます。白ゆりへ通う度、この本館がどんどん出来上がっていくのを見て、この日を大変待ち遠しく思っていました。そして本日拝見させて頂き、SHINOBU先生がいつもおっしゃる「子どもたちが主役」という言葉そのものの建物だと実感しました。肌に沿う木の温もり、空からのパワーが降り注ぐ吹き抜け、誰もが使いやすいトイレと手洗い、そして一番明るい空間が子どもたちのためのお部屋。危険な階段や段差の無いこの本館で、楽しく過ごす子どもたちの笑顔が目に見えます。また、家族のためのモニター付き控え室にも感激しました。いつも子どもたちと家族に寄り添ってくれる、白ゆりらしさのあふれた建物に、子どもたちも保護者も期待感でいっぱいです。こんな日が来るとは、6年前の私には全く想像ができませんでした。今から6年前、生まれたばかりの娘にダウン症を告知され、出産の喜びから奈落の底に突き落とされて、絶望の日々を送っていました。しかし、私を見つめる真っ直ぐな瞳の娘を見て、この子のために親として何をしてやれるのか手探りをしている時、岡山の凄腕先生が白ゆり発達支援センターを作るという話を聞きました。このチャンスを絶対逃さまいと、白ゆり発足の平成23年4月、電波時計で時間を確かめながら、朝9時の時報と同時に白ゆりへ申し込みの電話をしました。当時2歳の娘はまだ歩けなかったため、赤ちゃん体操に通い、自分の足でしっかり歩けるようになりました。歩行獲得の次は就学前の子どもが通うグループレッスンのますかっ組に入り、健常児のさくらんぼ組の子どもたちと共に約3時間の集団保育で、お友達とのかかわりや生活習慣を身につけました。グループレッスンと並行してSHINOBU先生のマンツーマンレッスンも受け、ほとんど話せなかった娘が今では平仮名や数字の読み書きを少しずつできるようになっています。来月からは小学生になるので、学童のグループレッスンにも通う予定です。赤ちゃんから中学生、高校生になるまで、子どもの特性や成長に合わせて、切れ目のない支援を受けられるのも、白ゆりの魅力であると思います。思い起こせば、白ゆりへ通い始めたばかりの頃は、ほんの数人だった

お友達が、今では数えられないほどまでになりました。白ゆりに行けばお友達に会える、と思うと、子どもだけでなく親も大変心強いです。そして、今日ここに出席させていただいた保護者は皆、白ゆりで繋がっています。それぞれ子どもの特性は違っても、共に白ゆりで学ぶ子どもの保護者であり、決して一人ではありません。これからも私達はこの白ゆりで保護者の輪をどんどん広げていきたいと思えます。ここで、白ゆりで学ぶ子どもたちに伝えたいことがあります。みんながお父さんとお母さんのところへ生まれてきてくれたおかげで、私達は白ゆりの先生方に出会えたんだよ。

そして、みんなの「もっとお勉強がしたい。もっと自分の可能性を引き出して欲しい。」という強い願いが叶って、この本館が出来たんだよ。

たくさんの優しさが詰まったこの白ゆりは、みんなが一番輝くステージです。多くの方々への感謝を忘れず、これからも白ゆりで沢山学んで下さい。私達は、白ゆりで頑張るみんなをこれからもずっと応援するよ。

最後になりましたが、私達の子どものために、これほどまでお力を尽くして下さいの皆様方に心より感謝申し上げます。そして先生方、これからも子どもたちと私達保護者をどうぞよろしくご協力致します。本日はありがとうございました。」(原文)

### 【成果と課題】

事業発足当初、法人内に赤ちゃん体操指導員の資格をもつ職員は0名であった。以後毎年研修会に参加し、現在では有資格者が7名に増えた。職員は、研修会で得た基礎知識や理論をもとに、多くのダウン症の子どもたちの育てに直接かかわりながら、臨床経験を通して支援技術の向上に努めた。

当法人発達支援事業の述べ利用者数は、平成23年5月に月間85名であった。5年後の平成29年6月には月間905名(約11倍)となった。岡山市だけでなく他市・他県からの利用者も多い。ダウン症児だけでなく様々な特性の子どもたちの利用がある中、単純にこの数値だけをもって判断することは出来ないが、支援内容に対する保護者の評価と利用者数の増加に全く相関がなかったとも思えない。こうした点から、当法人の5つの支援の柱にも一定の意義があったと考えられる。

しかしながら教育実践の場においては、どの支援の柱がどれだけ子どもの育ちに有効であったかを数値等を示して実証することは難しい。5つの柱をもとに今後も実践を積み重ね、質的な記録を読み解き、

それを整理・分析することにより仮説を修正し、障害児通所支援事業者としてのダウン症児に対する有効な支援のあり方についてさらに検討を重ねたい。

**【参考文献】**

- 1) 厚生労働省 社会・援護局障害保健福祉部企画課 (2002) : 「国際生活機能分類 - 国際障害分類改訂版 -」 (日本語版)
- 2) 中島順子 : 「ダウン症児の言語・コミュニケーション」 日本ダウン症療育研究会赤ちゃん体操指導員養成コース資料 (2017)